ANA B767（東京便）

JAL MD-90（東京便）

J・AIR CRJ200（名古屋便）

高知龍馬空港で活躍する飛行機たち

＊写真資料：高知空港ビル20年史より

JAC SAAB（福岡便）

ANA DH8-Q400（大阪便）

安全第一の運行管理

現在、高知龍馬空港には、1日に平均70機、年間では約3万機が離発着しています。

国（国土交通省）の施設としての高知空港は、66名のスタッフで運営管理しています。航空会社の定期便を始め、小型機やヘリコプターなどの飛行スケジュールから離着陸・空港周辺整備などの業務を行っています。「安全が最重要。利用される方々を搭乗させ、エプロン（航空機が停留する飛行場内の区域）を出発離陸して、目的地のエプロンへ着陸するまでは空白の時間はありません」と梅川空港長。

飛行機が空港を飛び立つと、各空港の周辺区域はその空港の管制官が担当します。それ以外の空域は東京の所沢などにある管制官の管轄となり、常に飛行機との無線交信がなされているということ。こうして安全に誘導・監視がされているのです。

また「VOR／DME（保安無線施設）」という耳慣れない施設によっても安全が確保されています。これは飛行機のための灯台のような役割をしている施設で、高知県には空港と足摺岬に設置されています。この施設から常に飛行機へ電波を送ることで、誘導したり通過地点を伝えているのです。VOR／DMEは空の道を作っていると言えるでしょう。

安全飛行のための条件はまだまだいっぱいあります。

例えば高度の条件（左ページ上図）。西行きと東行きの飛行機ではその高度差を1千フィート（約300m）確保しています（2万9千フィート以下では500フィート確保）。さらに上下の間隔に加えて前後左右の間隔を取るので空中での衝突は考えられません。ただ、離着陸時は飛行機が一つの地点（空港）に集まるので特に注意が払われているようです。

このように十分な安全を考慮していてもやはり自然にはかなわません。気象条件によっては欠航したり、飛行中であれば元の空港に戻ることや近隣の空港に着陸することも考えられます。空港事務所はいろんな情報を提供し、それをもとに航空会社や航空機の機長が安全に離着陸できるか

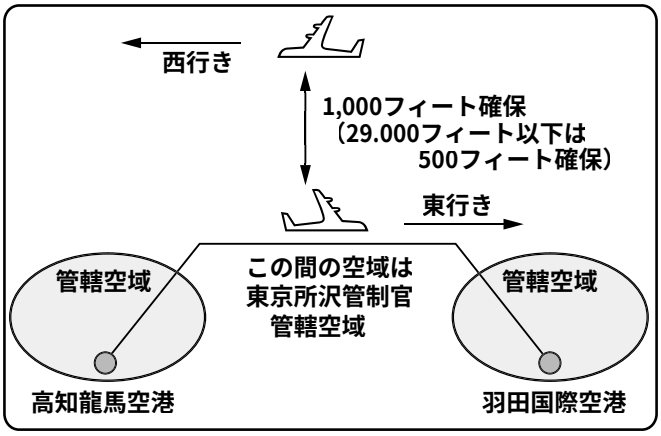
空港 Q&A

Q．飛行機に鳥がぶつかることはないの？もしぶつかったらどうなるんだろう？

A．飛行機のエンジンに鳥が巻き込まれる事故が時々あります。こうした事故を「バード・ストライク」といいます。
高知龍馬空港でも昨年に2回バード・ストライクがありました。エンジンのフィン（扇風機の羽根のようなもの）が10枚ほど壊れ、フィンは1枚約100万円なので1千万の修理代がかかりました。

Q．滑走路拡張で大型旅客機も離発着可能になったけど、海外への定期便も登場するのかな？

A．現在、高知龍馬空港から直接海外に行くことができるのはチャーター便があるとき。その際の出国手続きは、高知市の桟橋や香川県から税関の職員が来て対応しています。
空港内に税関の常駐スペースを確保できて、なにより利用客数が安定して見込めるようになれば、定期便もできるかもしれません。



高度による安全確保・無線交信管轄略図

の最終的な判断をします。

私たちが日常何事もなく飛行機を利用し、楽しい空の旅ができるのも、こうした地上業務の方や航空機のパイロットなどの連携した運行管理がなされているからなのです。

また、各航空会社担当者からは搭乗の際の保安体制についても話していただきました。

「現在の保安体制は最高レベルに達しています。靴を脱いでもらうなどの協力をお願いしていますので、早めに空港へお越しいただきたいです」とのこと。これも　安全には安全を　という、空の旅を提供する側の第1の願いであり、利用者の理解と協力が求められています。

▲左から高知空港ビル　の山本 祐一企画推進課長
JALの上山 美保所長、ANAの今泉 明所長

滑走路が拡張されると、パイロットに心理面での余裕が生まれ、より安全な飛行ができるといいます。大型機も就航可能となり利用者にとっても利点多いものになります。

滑走路再拡張工事については地元地権者の財産の提供など、理解・協力が無ければ叶わなかったこと。このことを忘れることなく、この南国市に高知の　空の玄関　があることを誇りに思いたいものです。

島崎広報委員長

飛行機を利用することが多いのですが、今回空港を取材して、安全面での管理体制の充実ぶりをあらためて知ることができました。

高知龍馬空港は、世界でも数少ない人名空港の仲間入りをしました。時代の先を読み、幕末の時代に海援隊を結成した龍馬が、今度は大空で大活躍してくれるかもしれません。私たちも海援隊ならぬ空援隊となって、その空港の愛称に負けないよう高知の空の玄関としての取り組みに期待し、応援していきたいと感じました。

みのる爺さん（広報委員）の飛行機思い出話

今から60年余り昔、高知などではめったに飛行機は見ることができなかった。

「高知に飛行機が来るき、見に行こう！」ということで、いとこと物部川の河原に朝早くから弁当持ちで歩いてでかけた。

朝７時だというのに河原にはもうたくさんの人が集まっていた。しばらく待ったが飛行機はなかなか見えない。あまりにも早く朝飯を食ってきたので腹が鳴る。「もう飯を食おうか」と皆飽き飽きしていると、「ブルン！ブルン！」と音が聞こえる。「やったー！来たぞー！」皆が両手を上げて奇声を発した。

長い箱に羽根をつけた大きなモノが「ブルン、ブルン」と音を発して、頭の上をゆっくり輪を描いて回り、河原に降りようと前を下げた。

初めて飛行機を頭の上で見て、「どういてこんなもんが飛ぶがやろう？」と思ったその時、「バーン！」大きな音とともに、木の折れたようなものが空高く飛び散った。何が起こったろうと飛行機をよく見ると、あのブルン、ブルンと回るものが全く無い。

プロペラが折れ飛んだのだった。長いこと待って、やっと飛行機が来て、これから曲芸などが見られると期待していたにもかかわらず、これでもうおしまいとなった。皆、ブスブス言いながら帰ったことだった。

楠目小学校の塀に上がって見ていた人たちが「ドドー」と倒れ、けが人が大分出たということも帰りに聞いた。

このような時代を生きてきた者にとって、今日の飛行機の発達は考えも及ばなかったことだ。